



遠慮 ———— 遠(とお)きを慮(おも)んばかる

遠慮とは遠きを慮ることである。“遠き”には二つの意味がある。時間的な遠い将来と空間的な広がりである。

よき人間関係を保つにも遠慮は必要で、そのために我々の祖先は礼という規範をつくった。時空間の遠きに思いを馳せ、人に対しては言動を控えめにする。それができる人を大人という。子供は遠慮を知らない。礼を弁えない。つまり、遠慮を知らず礼を弁えない人は、肉体的に大人であっても精神的には幼児性の域を脱していない人ということになる。心したいことである。

いま・ここ・自分の都合だけでなく、遠い将来に思いを馳せ、彼方此方を慮る。そういう父祖の営みがあることによって、私たちはこの時代の繁栄を生きていることを知らなければならない。

学識の人、小泉信三(慶応義塾大学塾長)にこんな言葉がある。「日本の国土は自然によって与えられたものではない。長い年月の間に我々の祖先が手を加え造りあげ、我々に伝えてきたものである。土地の開墾、耕作、道路、橋、ダム、港湾……有形のものばかりではない。宗教、道徳、制度、風俗、学問、芸術、その総てを含む日本の文化。これこそ我々が祖先から受け継いで子孫に伝える最も大切なものである」

私たちの住む世界は父祖たちの遠慮の賜なのである。

二宮尊徳も良く遠慮した人である。有名な秋ナスの話がある。

天保四年(1833)年の初夏、ナスを食べたら秋ナスの味がした。地上は初夏でも地中はすでに秋になっていると感じた尊徳は、桜町の農民にヒエを播くよう指示した。果たせるかな、その年は冷害で稲は実らず凶作になったが、桜町では飢える者は一人も出なかった。

尊徳の抜きんでたところは、冷害は一年では終わらないと判断し桜町の農民に天保五、六、七年と続けてヒエやアワ、大豆を植えさせそれを蓄えさせていったことである。尊徳の予想通り大凶作は、天保七、八年と続いて大飢饉となり、全国の餓死者は数十万人にも及んだ。だが、桜町の餓死者は皆無だった。尊徳の深い遠慮が桜町の村民を救ったのである。



人間学を学ぶ月刊誌「致知」11月号より

致知を購読して30年近く経ちます。毎月毎月教えられることばかりです。

見本誌の紹介制度があります。勝手に申し込みをしますので、忘れた頃に無料の一冊が届くと思います。ぜひ、ご拝読願います。